

# 大学教員の現場への貢献

徳島大学 教授

杉山 茂



退職まで半年となったときに、本稿への執筆を依頼された。よい機会なので、1人の工学系大学教員としての思いを書かせていただきたい。

私自身は大学教員となるまでは、石油学会や現在の研究教育対象である化学工学や触媒と無縁の分野で研究を行っていた。そのため若いときは周りに知った研究者も皆無で、それぞれの分野において同窓生で活動している若手研究者をうらやましく思っていた。しかし、このような状態であったことが、私には幸運であったようである。それぞれの出身研究室や研究分野を背負っている若手研究者の中には、出身研究室の方針にがんじがらめで、自分の意思によらず学会活動や大型プロジェクトに強制的に参加させられている者もいるように感じた。また、積極的に大型プロジェクトに参加している若手教員の中には、そのような大型プロジェクトを自分の力で実施できていると誤解している者も多いと感じていた。一匹狼のような私は、そのような大型プロジェクトに参加するすべもなかったが、石油化学部門を持つ企業から声をかけていただき、研究を行ってきた。そこで、身に染みて感じたのは、学側が企業の現場から乖離し、未来志向の研究に偏っていることであった。未来志向は間違いなく重要である。しかし、そればかりにとらわれると、現場の問題点を解決しようとする研究者がいなくなってしまうのではないか。

私は、通常の若手研究者が経験する学会活動の実務や大型プロジェクトへ参加することなく、教授に昇格した。それ以降は学会活動にも参加できるようになった。研究活動は、企業の現場からの問題に対処することに専心した。学会活動は、石油学会や化学工学会といった出身研究室にあまり影響されない学会で、何でもやるというスタイルで参加した。これらの学会は産側との連携が強く、大学関係者はもとより企業の現場の方とのコンタクトが私にとっては大変ありがたかった。

このような背景によるものかはわからないが、振り返ってみると私自身の研究対象は、触媒の劣化因子を利用する触媒開発という大学でも企業でも研究しない分野であった。しかし、企業の現場の方から見ると、触媒劣化は避けて通れない問題ではないだろうか。ある講演会で、「触媒劣化を逆手に取る」と私が言うと、次の産側の研究者が、「触媒劣化を逆手に取ることはできません」というくらい現場ではあきらかに近い状況ではないだろうか。そこに納得できずに現在までに至っている。

退職を迎えるにあたって、企業の現場が困っていることに少しでも対応できたことが、少しだけ誇れることかなと思っている。